
ヒナギクの咲く丘に

I f

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナギクの咲く丘に

【Nコード】

N4797F

【作者名】

If

【あらすじ】

世界最強を誇る軍事国、ディジー公国に赴任することになった日丸帝国自衛隊少尉の岩館公助はそこで異能力者の少女達に出会う。戦地で戦う彼女たちを指揮する公助はいつもこう言い聞かせる。「生きて、あの丘に戻ろう」と。

第一話 プロローグ

転属

さて、これから行く島はどんな国なのだろうか。

世界の中心にして最強と謳われる国家——にちまゐていこくディジー公国へと向かう飛行機の中で日丸帝国自衛隊少尉の岩館いわだて 公助はふと思った。

彼は突然日丸帝国政府からの命令でディジー公国軍指令へと転属になった。それはきつと彼が片言でもディジー語を話せるからであり、それと同時にとある異能力を持っているからであると考えられる。

「ああ、母さんも連れてきてあげたかったなあ……」

公助はそうばやき、窓から遙か下方の雲を眺める。

公助の母に転属の話をすると、彼女は彼を羨ましがった。というのも、公助の母はディジーの生まれで生粋のディジー民族であるからである。

やがて公助の新しい赴任先となるディジー公国の綺麗な海と自然が見えてきた。

今更外国を空から眺めたところで興奮したりはしないが、彼はやけに心躍っていた。

これから、異能力の仲間に出会える。

それが今まで肩身の狭い思いをしていた公助には、何より嬉しい事に思える。

当然のことだが、異能力の持ち主を一般の人は快くは思わない。

異能力者がいるだけで、その場を嫌い、その人を避けた。

だから今現在ディジー公国を世界中が狙っているのも、世界中心だからというだけではなく、異能力者の殲滅という目的もあるのだ。

島に近づくにつれて飛行機が高度を下げていく。それによって、島の中央に雄大な丘があるのを確認できた。

赤ともピンクともつかない色が風に揺れる。

一面の花畑。

（リビングストンのデイジーは有名な観光スポットなのよ）

母がそう言っていたことを公助は思い出す。暇が出来たら、一度は行ってみようと心の中で密かに思った。

そんな思いをよそに、彼を乗せた飛行機はゆっくりと高度を下げ、やがて静かに滑走路に車輪をつけた。

さて、空港に迎えの人が来ているはずだ。

どんな人が迎えに来てくれるのか、公助は少しばかり楽しみにしながら飛行機の席を立った。

一章 ユリオプスの人々 1

入国審査を終わらせて、公助はロビーを見渡した。

一目見れば迎えの人が分かると思っていたが、意外と人が多い。

公助はとりあえず軍服を着た男の人を探す。それにしても彼の気のせいか、女性しか見当たらない。

その場に止まっても決して探し当てることは出来ないと悟ったのか、公助は荷物を手に持ちながら空港のロビーを歩き回る。どこににいるのだろうか、軍人の方は……。

しばらく歩き回っていると、やがて人ごみの中に目立つ旗印を見つけた。

黄色の生地に、ピンク色の花。

紛れもなく、あれはディジー公国の国旗である。

「……こんなところで用もなく国旗を振っているわけないよな……」

公助は一人呟いて人ごみを掻き分け、その国旗を目指した。

そして人ごみが消えた瞬間、一瞬彼の時間が、いや、この空港の時間が止まってしまったように感じた。

とにかく、動けないのだ。

あまりにも壮麗な姿で、公助の前に立つものだから。

「……あなたが、日丸帝国の指令の方ですか？」

大人しそうな声が入る。

「指令ではないですけど……日丸帝国自衛隊の配属、岩館 公助少尉なのは確かです」

公助は思わず敬礼をした。それを見て彼女は口元に手を当てる。「ふふっ、面白い方ですね」

大人っぽい人だと公助は思った。そうこうしている間に、彼女は青いリボンのついた帽子を頭から取った。

帽子でよくは見えていなかったが、今こうして改めてみると整った顔をしている。

リボンで結ばれたロングヘアが公助の目を惹いた。

目は細いものの、決して目つきが悪いのではなく、始終笑っているような優しさに溢れた目だった。

「ご紹介遅れました。私はディジー国軍ユリオプス支部の菊池^{きくち} 比^ひ奈代^{なよ}です。『ヒナ』って読んでくださいね」

軍人？ この子がか？

公助は首を傾げる。軍人で男じゃなかったのか？

それに服装だって軍服ではなく、ワンピースにカーディガンというごく普通の服装だ。とても軍人には見えない。

「ふふっ、そう思いますよね。ですけど公助さん、これから行く基地はほとんどの方が女性ですよ」

なおも耳を疑う言葉ばかりである。女性しかないのに世界最強の軍事国家なのか？

「あの……ずっと疑問に思ってたんですけど、何でこの国は女性がこんなにも多いのですか？」

公助が辺りを見回してそう尋ねる。比奈代が少しばかり表情を曇らせたのを公助は見逃さなかった。

「……あの、第三次世界大戦で皆死んでしまったんです」

第三次世界大戦。

その単語がやけに公助の胸に残る。

今から三年前、陰西暦583年、公助はこの大戦に副指令として参加していた。日丸帝国が戦争放棄する一年前のことである。

あの時、日丸帝国は甚大な被害をディジー公国に被っていた。それも全て、公助の提案した作戦でのことだ。

この大戦を思い出すと、ひどく胸が痛む。自分がこの国を不幸のどん底に陥れたのだと、認めたくなかった。

最終的にはディジー公国が勝ったものの、それで男性の人口が少なくなつたせいで、今もライス共和国他、世界中からの格好の的となっているのは自分のせいだとは彼は思いたくなかった。

「……あの、すいません。こんな話題を持ちかけてしまって……」

「いえ、話を持ちかけたのは僕の方です。こちらこそ申し訳ない……」

公助は深々と頭を下げる。対応に困った比奈代は慌てふためきがら口を開く。

「とつ、とりあえず、軍部まで案内しますね！　じゃあ付いてきてください……」

比奈代はそう言ったきり青いリボンの付いた帽子を被りなおし、公助に背を向け、ロビー出口へと向かう。公助は「お願いします」と頭を上げてから律儀に再びお辞儀をした。

比奈代は当惑の表情を隠しきれないでいた。こんな紳士的な人は、今まで相手にしたことがない、と。

一章 ユリオプスの人々 2

空港のロビーを出て駐車場へと歩いていくと、そこには一台の軍用ジープがあった。もう日丸帝国では見られないほど古い型のジープで、公助は多少の興味を持ちながらそのジープを眺めた。

「あの、このジープがどうかしたんでしょうか？」

比奈代は訳がわからないといった表情で首を傾げる。

「いや、あまり見かけない型のジープだなと思ひまして……」

率直に古ぼけていると言えなくて公助は言葉を濁す。

比奈代はジープに乗り込むとエンジンをかける。それを見て公助はジープのトランクに荷物を乗せて自分は助手席に乗った。

「あの、比奈代……さんが運転を？」

「『ヒナ』でいいですよ」

分かつてはいるつもりなのだが、どうも言葉に出来ない。公助は昔から女性に対して多少の苦手を感じていた。

「……ヒナ……さんが運転を？」

「そうですよ。他に誰も連れてきてませんから」

公助が名前と呼ぶのを躊躇っているのがおもしろいのか、比奈代は口元に手を添えて笑う。

「いえ、別に……」

それきり公助は押し黙る。彼は女性と話すのをそれ程得意としていない。

それにしても変な光景だと公助は思う。隣の白い帽子を被った普段着の少女が軍用ジープを運転しているのだから。

しばらく何もない通りを車で走っていると、やがて一面の野原が姿を現した。

「分かりますか、あの丘……」

比奈代がハンドルを片手に花で覆われた丘を指差す。

「ええ、飛行機に乗ってる時に、中から見ました」

一面に咲き誇るヒナギクの花。

この「デイジーの丘」はこの国最大の観光スポットと言ってもあながち間違いではない。

「母が言っていました。あのデイジーの丘に行きたい、と」

「お母様が？ デイジーが好きなんですか？」

「いえ、母はこの国の生まれなんです」

「まあ」と言っただけで比奈代は口元に手を当てる。それにしても、車を運転しているというのに器用な人だ。

「じゃあ、公助さんのデイジー語というのは……」

「ええ、母から教わったものです」

「そうですか、どうりでお上手で……」

比奈代はそう言っただけで感心した様子で再び両手でハンドルを握り締めた。

「私達が所属する基地というのは、あの丘の下にあるんですよ」

「そうですか……」

母から聞いたことがある。あの丘の下には軍の基地があって、間違っただけで足を踏み入れたら危険な目に遭う、と。

「公助さんはこれからユリオプス基地に所属になると思います。しばらくしたら、コモンの本部の方へ顔をお出しになるんでしょう？」

公助は何も言わずに頷く。コモンとは、この国最大の軍事都市だ。公助が所属することになるユリオプスとは比べ物にならない程の軍事力がこの町に集中している。

「でも、それより先にユリオプス基地の主任からでしたね。彼女はとても頑固な方で、初見の方を毛嫌いする傾向があります。どうか無礼のないように」

比奈代は警告ととれるか分からない口調で公助に忠告する。公助は「分かりました。気を付けましょう」と言いながらふと別のことを思う。

そんな重役まで、女性なのかと。

一章 ユリオプスの人々 3

「今回、新たにディジー国軍ユリオプス基地に配属となりました、岩館 公助少尉です」

ディジー国軍ユリオプス基地司令部。

この部屋には案内人の比奈代を含めて四人の軍人がいた。

公助はその人達に自己紹介を済ませ、敬礼する。

「あなたですか、新たに配属された司令というのは」

「はい、そうですか……」

司令部の中央に置かれた席から立った一人の麗しき女性が口を開く。

「ワタクシはディジー国軍前指令のシンディ・パーニスですよ」

「パーニスって、全大公の……」

「ええ、シモン・パーニスの娘ですよ」

どうりて軍人らしい服装をしていない。ツインドリルというべきか、ぐるぐるに巻かれた髪の毛を揺らしながらシンディは公助の方に歩み寄る。

「それに、あなたはこの軍では少尉ではありません。『司令』です」

「司令とは言っても、階級は少尉では……」

「あら、我が軍では階級制を採用していないのをご存知なくて？」

ドレスに包まれた胸元のペンダントが目に入る。公助は「はあ……」

「……」としか答えることが出来なかった。

「勉強不足ですわね。精進が足りませんわ」

「す、すいません……」

公助は深々と頭を下げる。彼はシンディに何も言い返すことが出来なかった。

ふと彼の視線に、白いものが入る。公助が面を上げると、それがシンディの手にはめられた白い手袋だというのが分かった。

「でもまあ、歓迎いたしますわ。ようこそ、ディジー国軍へ」

シンディが手を差し出すので、公助はその手を握るほかなかった。階級制がないというのだから、おそらく前大公の娘であろうと、握手を交わしても大丈夫なのだろう。

「さて、この軍の首脳メンバーを紹介いたしますわ」

シンディは手馴れた様子で机の近くに並んでいた二人を紹介する。

「左の女性の方はこの軍部の作戦隊長、フローラ・ヘンリー。この軍部のご意見番ですわ」

「よろしく願います」

フローラが軽く会釈をする。白衣で鼻かけメガネという研究者らしき格好をした彼女はこれまた軍人とは言いがたいほど美しかった。公助も会釈を返し、シンディはそれを確認して紹介を再開した。

「右の男性の方はフランコ・吉田。この軍のあらゆる管理を彼に任せていますわ」

「よろしく」

黒髪で髭の生えた男性がそう言う。彼の片方の瞳が青色であることから彼がハーフであることがうかがえる。公助は「よろしく願います」と敬礼を返した。

「また、彼はこの軍で唯一の男性ですからね。あなたも頼れるでしょう」

公助は目を丸くする。まさか、この軍部に男性は二人しかいないのか。

「……そんなに男性の人数が少ないのですか？」

「あら、少ないも何も……」

シンディが淡々と答える。

「この基地自体、九人しか所属してなくてよ」

「えっ……」

公助は信じられない思いだった。

世界最強の軍事力を持つ国家の中樞とされる軍隊が、人数不足で苦しんでいるなんて。

一章 ユリオプスの人々 4

「これから、この基地の主要施設を紹介していきます」

「あの、他の方は紹介してくれないんですか？」

基地のメインとなる建物（トランク館とかいったか）の廊下を歩きながら比奈代が説明を続ける。司令部にいた三人はまだ仕事があるというので公助の基地案内については来なかった。

「本当は一度に紹介したいところなんですけど、おそらく集まりませんしね……」

比奈代は困った表情を見せながらそう呟く。

軍隊なのに、なんでこんなにも統制が取れていないのか。しかもこんなに人数が少ないのだから本当は統制が取れていなければならぬはずである。

「では、人がいそうなところから紹介していきますね……」

比奈代は頬に手を当てて微笑を浮かべながらそう言った。

「では、まずは医務室です」

比奈代は手で医務室を指し示す。それにしても、この建物はどことなく学校に似た雰囲気醸し出している。各部屋の扉の上部にはデイジー語で各部屋の名前が書かれたプレートが掲げられているのだ。

「ここには、我がユリオプス基地が関係した戦闘で負傷した人全てが搬送されてきます。もちろん、敵の兵も含めて、全てです」

「はい？」

「……もしかして公助さん、我が軍の規則知りませんか？」

「規則？」

公助がそう聞き返すと比奈代が戸惑いの表情を見せる。そしてその表情をすぐに隠し、彼女は扉に手の甲を打ちつけた。

「分かりました。我が軍の規則は後で説明します。今は気にしない

てください」

コンコンと音が鳴り、中から「はい」と控えめな声が聞こえる。
「比奈代です。中に入っても大丈夫ですか？」

比奈代が扉の向こうの人物に話しかける。扉の中の人物はしばらく間を開けてからやがて答えた。

「はい、大丈夫ですよ」

その声を聞いて比奈代は扉に手をかけ、静かに開けた。

「失礼します」

比奈代の声が続いて公助も軽く頭を下げ、医務室に入った。

医務室の最奥部、ぽつんと置かれた机に向かって書き物をしている女性がいる。やがて彼女は椅子を回して二人の方に振り向いた。

「――どうされました、怪我ですか？」

非常に顔の整った綺麗な女性がそう話しかける。髪を後方で一つに縛り、眼鏡をかけ、濃いグレーのナース服と白地に同じくグレーの赤十字が入ったナースキャップを被った彼女は、医師ではなく、看護師にしか見えなかった。

「いえ、赴任してきた新しい司令の案内で立ち寄りました。エリシアさんにも紹介しておきたくて……」

「そうでしたか」

エリシアと呼ばれた彼女は椅子から立ち上がって公助の元にやってくる。

「エリシア・コートです。ここの基地の医務室長を担当しています」
女性――エリシアは深々と頭を下げる。それにつられて公助も頭を下げる。

「新司令を任せました、岩館 公助と申します。どうぞ、よろしくお願いします」

「そんなにかしこまられてはこちらが困ります」

エリシアは公助に面を上げるようそう言う。だが、そこで比奈代が余計なことを口にする。

「あ、言い忘れていましたが、エリシアさんは公助さんが所属する

ことになる『援護隊』の隊長です」

「比奈代さん、それを今言ってしまったら……」

案の定、面を上げようとしていた公助の動作が止まる。自分の隊の長にどうして頭を上げられようか。しばらく公助はそのままの体勢を維持していた。

「公助さん、顔を上げてください」

エリシアの再三の説得で公助はようやく楽な体勢に戻った。

「それほど頭を下げられるとこちらも困ります。仮に隊長を決めているだけで、階級はないのですから」

「そうです公助さん、どうしてそんなにかしこまるんですか？ 先程シンディさんと面会した際は大丈夫でしたのに……」

「あ、いや、それは……」

シンディが階級制がないとはっきりと断言してくれたから、とは言えなかった。公助は極端に『階級』という言葉に弱い。上下関係のしつかりした紳士なのである。

「公助さん、次どなたかとお会いする時にはそれほどかしこまらなくてもよろしいですからね」

公助は頷くが、どうにもそのように出来そうにない。「だったら、何でヒナさんは自分に敬語なんですか？」とは、決して言えなかった。

一章 ユリオプスの人々 5

しばらく廊下を歩いて進んで、やがて見えてきたプレートには「キッチン」と書かれてあった。

「キッチンには誰か……いらっ、いる……のか？」

先程比奈代に言われたように敬語をなくして話してみるが、どこかぎこちない。これだけ通常の言語での会話に慣れていないのも珍しいものだ。

「いますよ。我が軍の陸隊の隊長でキッチンの住人が」

「キッチンの住人？」

「ええ。彼女はとても料理好きでわざわざ軍のキッチンで皆さんに食事を作ってくれるんですよ。それにヒナでも……」

「ヒナ？」

「いや、何でもありません！」

比奈代が顔を赤らめて少し強めの口調でそう言った。そんな彼女を見るのが初めてだった公助は少し疑問に感じた。

「……と、とにかく中に入りましょう！」

半ば強引に話を進めて比奈代がドアノブに手をかける。

それにしても陸隊隊長で料理長とはイメージが沸かない。果たしてどんな人物なのかと公助はゆっくりと開く扉を見ながらそう思った。

「ヤンさんいますか？」

「……何アルか？」

キッチンで小麦粉を熱心に練っているコックの衣装を身にまとった少女がいた。

「あ、作業中ですか？」

「別に構わないアルよ」

とは言いながらも、彼女は比奈代と公助の方を見もせずに必死に小麦粉を練り続ける。

「珍しいアルね。つまみ食いなら許さないアルよ」

「そんなことしませんよ。ちょっと紹介したい人がいるんで寄ったんです」

「紹介したい人？」

途端に彼女の肩がびくつと跳ね上がる。公助にはその理由がいまいち理解出来ていない。

「大丈夫ですよ、ヤンさん。こっち向いてください」

しかし彼女は動くことなくその場で硬直している。

「どうかしたのか、彼女……」

「すいません、彼女、とびつきりの人見知りなんです。特に男性に對してなんですけど、だから初めての人なら誰でも……」

この年齢でまだ人見知りなどするのかなど思いながら公助は彼女の後ろ姿を見つめる。頭に二つついた白いお団子などを見ていたら、非常に可愛らしいなという感想を彼は抱いた。

公助はゆつくりと彼女の元に歩み寄る。そして彼女の隣に立った。

「この度、新司令としてこの基地に配属された岩館 公助です」

公助は右手を差し出す。彼女は目だけを動かして公助が差し出した右手を見た。

「名前、何て言うの？」

彼女の視線が少しずつ移動して公助の顔を一瞬見た後、すぐに目を逸らした。

「……………ヤン……………」

「えっ？」

「……………ヤン・シャオメイ」

「ヤンか。いい名前だ」

彼女——ヤンはそう言った公助の顔を恐る恐る見つめた。公助は笑顔を見せる。

「……………あっ……………」

「あ、握手？ 駄目ならしなくても大丈夫だよ」

そう言って公助が腕を引っ込めようすると、突如ヤンにその手を

引っ張られた。

「……だ、大丈夫アル……」

ヤンは恐る恐る公助の右手に自分の右手を近づけ、やがてその手が重なった。

「よろしく、ヤン」

ヤンは無言で頷く。そしてすぐに彼女は手を離れた。一秒と満たない握手であつたが、それでも公助は満足だった。

「じゃあ、これで」

公助はヤンに背を向ける。そして比奈代と一緒に扉へと向かった。

「あつ……」

「何？」

公助は振り返る。しかし、ヤンは顔を真っ赤にしてすぐに首を左右に振った。

「……何でもないアル……」

「そうか」と言つて公助は再びヤンに背を向けた。

「……珍しいです」

「何が？」

公助は首を傾げる。

「ヤンさんが初対面の男性の方にあれだけ話しかけるのはとっても珍しいんです」

「そうなのか……」

公助は首を傾げたままだった。まだヤンが心から公助と接してくれたとは思えない。どこかに壁がある。それを取り払えるまではまだ完璧だとはいえなかった。

「それにしても公助さん……」

「何？」

比奈代は一拍開けてから再び口を開く。

「……なんか、まだぎこちなかったですよ」

「……」

それでも精一杯努力しているのだ。少くくらは褒めてくれても

いいだろう。そうは思っても決して口に出せない公助だった。

その頃、ヤンは顔を真っ赤に染めたまま公助と比奈代の姿を見つめていた。彼女は口元を小さく動かしている。しかし、それが彼女から言葉となって出てくることはなかった。

一章 ユリオプスの人々 6

次に公助が案内されたのはトランク館の屋上だった。

「……こんなところに人がいるんですか？」

公助が首を傾げながら屋上のドアノブに手をかけている比奈代に尋ねる。

「ええ。恐らくこちらに空隊の二人がいると思います」

公助の方を向きながら比奈代は屋上のドアを開いた。眩いばかりの日光が公助の視力を一瞬奪う。そしてし目を瞑ったまましばらく経ってから彼はようやく瞼を開けた。

「アンジェラさん、リーザさん、二人とも降りてきてください」

空中に浮かぶ二人の少女は比奈代の声に気付くとゆっくりと下降を始め、そして公助と比奈代の前に降り立った。

一人は白い法衣を身にまとい、公助の目の錯覚か、頭の上に金色に輝く輪つかと、純白の翼が視界に入ってきた。

もう一人の少女は対称的に黒い法衣を身にまとい、先っぽの曲がつた黒い帽子、そしてあろうことが箒に跨っていた。

「……この二人は？」

「先程も紹介したように空隊の二人です。向かって右側の白い法衣の彼女が空隊隊長のアンジェラ・シモンズさん。左側の黒い法衣の女性がリーザ・ヘクセさんです」

「アンジェラです。よろしく」

彼女が右手を差し出す。公助は握手に応じながら彼女の緑髪の上の輪っかに目が行った。

「……それは、本物？」

「ええ、もちろん。天使族をご存じなくて？」

アンジェラは公助に聞き返す。公助は首を横に振った。

「いや、話は聞いたことがあるんだけど、とつくの昔に滅びたものだ……」

「そうね、初めてあたしを見た人はみんなそう言うわ」
アンジェラは頷いた。

天使族とは、人類が誕生したとされる陽西暦の始め頃に存在していた最初の民族の一つである。その頭上で輝く輪と純白の翼から最も高貴な民族とされ、しばらく民族の長を務めていたが、陽西暦一〇二四年——つまり陽西暦最後の年の他部族の反乱によって滅んだとされている民族であった。

「あたしは天使族の末裔よ。恐らく現時点で天使族は私と両親しかない」

アンジェラはどこか寂しげな視線を下に落とした。しかし、それも一瞬のことですぐにアンジェラはその場を取り繕う。

「それで、リーザちゃんは自己紹介しなくていいの？」

こちらにもまた特徴的な人物だなと公助は視線を彼女に移す。

「わたしはリーザって言うの。よろしくね」

アンジェラよりも大分幼い印象が見受けられる。下手したら一桁に見えなくもない。少なくとも日本の中学生よりは大分幼いイメージがある。

「……君は、魔女の末裔？」

「何で分かったの！？ お兄ちゃん凄いな！」

この衣装を見て一目で分からない方がおかしいと公助は思う。それにしてもお兄ちゃんとは一体どういったことか。

「わたしはヘクセ一族の末裔。『魔女狩り』から逃れた唯一の一族だよ」

魔女狩り。

そう聞いて公助は胸が痛んだ。

魔女狩りは陰西暦五八三年、第三次世界大戦で連合国側が同盟国側の主力となる軍事都市であるサバトを攻撃した際、各国の司令が「魔女と思われる者のみを攻撃せよ」と命令したのが始まりで、それを提案したのが他でもない、当時日丸帝国の副司令だった公助なのである。

申し訳ない気持ちがある。彼の心に渦巻くが、ずっとそうもしてられない。彼はそのようなことを決して表に出さず、話を続けた。

「それで、お兄ちゃんは何て言うの？」

「えっと、自分……僕は今度司令に任命された、岩館 公助。よろしく」

「そう。じゃああなたはこれから『コーさん』ね」

「こ、コー……さん……？」

今までの公助の人生の中で一度も呼ばれたことのないあだ名だった。

「よろしくね、お兄ちゃん」

一方のリーザは、満面の笑みで公助にそう言った。この光景だけ見ていると、とても軍隊には見えなかった。

「……そう言えば——聞いた話だけど——この軍隊って異能力者の集まりだよな？」

比奈代をはじめ、三人がそれぞれ頷く。

「あの、それぞれの異能力を知らない、作戦の立てようがないんだけど……」

比奈代はしばらく目をぱちくりさせる。そして、思わず「……あつ」と声が漏れた。

「すいません、公助さん。異能力の紹介を全くしていませんでしたね」

そう言うってから比奈代はアンジェラとリーザを指し示した。それにしても彼女はマイペースというか、どこか抜けた人物だ。

「アンジェラさんの異能力は『天空の使者』」

『天空の使者』。天使族に備わっている異能力で、優れた飛行能力とバリアー能力がある。この鉄壁のガードによって当時の天使族は頂点に立っていたのだ。

「そして、リーザさんは『垣根の上にいる女』の持ち主です」

『垣根の上にいる女』も魔女一族に伝わる異能力で、魔法——但し白魔法は除く——を自在に繰り出せるという能力である。しかし、

天使族とは違つてこの能力のせいで魔女族は日の当たらないところに追いやられたのである。

「そうか、だから空隊だと……」

「ええ、空を飛べるの私達だけですしね」

アンジェラは答える。九人しかない軍隊の中で、『空』が使えるのは大変頼もしい。その分、各戦力の負担は大きくなるわけだが。「そう言えば、私もまだ言つてませんでしたね。私の異能力は『メデューサの瞳』です」

「メデューサつて、あのメデューサ？」

「ええ、あの神話のメデューサです。とは言つても、異能力は石化ではなくて、千里眼と、物質化です。それが全て目を通して行われ、万能であることから『メデューサ』の異名を付けたのです」

異能力の名は、民族間で伝わるものを除いて自分で名を付けることが多い。そのためか、異能力の内容を聞かないとどんな異能力者なのか分からないこと度々があるのだ。

異能力には大きく分けて二種類ある。一つは民族継承。もう一つは遺伝継承である。民族継承と遺伝継承の違いは、民族継承は絶対的なものであるのに対し、遺伝継承は突然変異から発生したものであるということである。『天空の使者』と『垣根の上にいる女』は前者、『メデューサの瞳』は後者に分けられる。

「……そういえば、私も公助さんの異能力を聞いていませんでした」比奈代が頬に手を当てながらそう言う。アンジェラとリーザの二人も新司令の異能力に興味があつた。

「そういえばまだ言つてなかったね。僕の能力は『軍神』。そんな大した能力じゃないよ」

「『軍神』。ぴったりの能力ね」

アンジェラの言葉に比奈代もリーザも頷く。

「そう言えば僕も今までに出会つた人達の能力を聞いていないんですか……」

「ああ、それでしたら、一度に言いますと混乱してしまいますので、

追々説明していきます。では、お二人の訓練もあることでしょうし、
こちらへんで失礼しましょう」

本当は今すぐにでも聞いて全員的能力を把握したいところなのだが、確かに混乱する可能性もあるので、公助は黙っておいた。

「じゃあね、お兄ちゃん」

「また来てくださいね、コーさん……」

二人は笑顔で手を振り、それから空へと飛び立った。

一章 ユリオプスの人々 7

公助と比奈代の二人はトランク館から離れ、軍の滑走路（誰が戦闘機に搭乗するのだろうか）を横切つて機械音のする建物へと歩いていった。

「ここは『リーフ館』といいまして、いわば、兵器格納庫兼修理場です」

比奈代がそう説明しながらリーフ館の扉を開けると、外まで漏れていた音がより一層大きくなった。

「アリスさん！ 作業ストップしてください！ 比奈代ですー！」

比奈代は両手でメガホンを作つて叫ぶ。何度かの呼びかけの後に、ようやく機械音が止んだ。

「……どうしたヒナさん。なんか用？」

兵器の奥から緑髪をポニーテールにし、薄汚れたつなぎを着た少女が姿を現す。

「ええ、新司令の方が到着したので、アリスさんに紹介しよう」と……

「そうかい」

そう言つて少女——アリスは比奈代の隣にいた公助に視線を移す。「ウチはアリス・ファルディエ。この軍の兵器隊隊長を任されてるよ」

アリスは右手にはめていた手袋を外して、右手を差し出す。公助もそれに応じて右手を差し出した。

「僕は岩館 公助。ヒナ……さんから紹介されたように、この軍の新司令です。よろしく」

「分かった。よろしくな、司令」

司令といわれて公助は少しばかり気恥ずかしかった。まだ何も分かっていないのに、司令とは……。

「彼女は異能力、『神々の鍛冶場』の持ち主です」

「『神々の鍛冶場』？」

「まあ要するに、天才修理工ってことだよ」

アリスは握手を終えてからそう答える。なんという自信の持ち主だ。それだけ機械に詳しいということか。

「じゃあ、悪いけどこれで。まだ仕事が残ってるから……」

アリスはそう言って外した手袋を再びはめなおした。

「ああ、作業の邪魔してすまなかった」

彼女は背を向けながら左手を上げて応える。それを見て公助はすごく男らしい人だなと思った。

「さて、じゃあ私達も行きましょうか」

「ええ」

比奈代が扉を開け、二人はリーフ館を後にした。

「さて、これで全員紹介しましたね」

「でも人数が合わないけど……」

「ああ、その方は明日紹介します。本日はいらっしやらないんで」

公助は首を傾げる。非番ということか？　こんな人数が少ないのに非番なんてとれるのか？

「じゃあ、本日は仕事ありませんので、宿舎まで案内します」

「そうか、じゃあ……頼む……」

彼は曖昧に頷く。本当にもう働かなくてもいいのだろうか。いくら戦争中ではないとはいえ、もう少し仕事もあるのでは……。

しかし、公助は口を開くことなく宿舎までたどり着いた。すると、宿舎の前で比奈代が一枚の白い紙を差し出す。

「えっと、明日は軍の仕事はお休みです。その代わり、明日はここに来てください」

「え、何だって……？」

事態が飲み込めないながらも公助が比奈代から受け取ったのは、どうやらユリオプスの地図らしく、細かな中心街の様子が事細かに書かれていた。

「軍からお金は支給されませんから、公助さんはこちらで働いていただきますと思います」

「……………」

さらに理解不能になる。給料を支給しない軍部なんて存在してもいいのだろうか？ まして、それがこの世界最強の軍事力を持つ軍部であるとは…………。

「…………で、ちなみに何の仕事を……………」

比奈代は満面の笑みを浮かべて答えた。

「はい、喫茶店です……………」

一章 ユリオプスの人々 8

宿舎に入って部屋に案内された後、公助は風呂に入ってから食堂にいつて食事を取った。食堂は宿舎になく、トランク館まで行くのは不便であつたが仕方がない。公助はのんびりとトランク館までの道を歩きながらふと先ほどのことを思い出した。

喫茶店。

その単語が出てきた直後に公助の脳内は思考停止に陥った。

軍人として派遣されてきたのに、なぜ喫茶店で働かなければならないのか。そもそも、なぜ軍人なのに給料が出ないのか。

軍隊が慈善事業という時点でおかしい。国を守るためのものが、なぜ人々の善意によって賄われなければならないのか、それが彼には理解できなかった。

それでも、少女たちはそこにいる。

国を守るため、大切な人の命を守るために彼女らは自らの身を削っている。

そんな役職をこなしているのにもかかわらず、何で少しばかりのお金も出ないのか。その状態でなぜ彼女らは文句ひとつも言わないのか。

彼はしばらく考えていたが、しかしいくら考えても答えは出てこなかった。

不本意ながらも彼は明日から喫茶店で働かなければならないのである。

「……まあ、いい骨休めにもなるか」

公助は前向きに考えを改め、明日に備えるために今日は早めに寝ようと決意した。

食堂に行くと、シンディとフローラが仲よさそうに談笑しながら食事を取っていた。二人は公助の姿に気づくと、手を上げて彼を呼

び止める。彼は頷いて顔を背けているヤンから夕食を受け取ると二人の座っているテーブルに向かった。

「どうだった、この基地は？」

フローラが公助に尋ねる。公助は椅子に座りながら答える。

「いいところですね。過疎というか、人がいないのが少し気になりますが……」

「そうね。でも必要以上にいるよりはいいじゃない」

確かにこれなら名前を覚えるのも簡単ですむのだが、どうも戦力不足であるというのは否めない。やはり少ないよりは多い方がいいのではないかと公助は思う。

「それはそうと、全員に会えましたの？」

「いえ、その、一人だけ会えませんでした」

シンディが何かを思い出したように口を開く。

「ああ、そう言えばピリカは今日非番でしたわね」

「非番……ですか？」

「ええ、そうでしたよ。慈善事業ですもの。非番くらいとらないと発狂してしまいますわ」

さすがにその辺りは考えているのだろう。だが、ただでさえ人数がいないのに非番なんてとれるのだろうか。

「もちろん、非番とございましたも緊急事態には召集がかかりますわ。それ以外はワタクシたちも特に何もしませんもの。非番はそう重荷でもありませんわ」

公助が日丸軍に所属していた時はたとえ軍師といってもトレーニングはあったのだが、ここではそれすらもないのかと、彼は軍の適当さに呆れる。

「……そういえば、ピリカ……さんの異能力って何ですか？」

公助がシンディに尋ねると彼女は少しばかり視線を上によらず。

「えー、何でしたっけ、その……」

「『カムイの御子』」

「ああ、そうそう、そうでしたわ」

フローラの助け舟にシンディは頷く。基本的に彼女は他人に興味がないようだ。

カムイの御子。

公助にはその言葉に聞き覚えがあった。

確か、日丸帝国の北部の先住民の一族がその異能力の持ち主であった。

「あの、その能力は具体的にどういう……」

シンディではあてにならなそうだったので、公助はフローラに尋ねた。それにしても、彼女が前司令だったとは信じがたい。

「自然を自在に操る能力だそうよ。私はよく見た事がないから分からないけど……」

やはり、本人を見てみなければ分からないということか。

「それより……」と、シンディが口を挟んだ。

「司令、明日から早速喫茶店でアルバイトを行うそうですわね。楽しみですわ」

「えと、シンディさんもアルバイトを？」

「ええもちろんですよ」

彼女は少しばかり怪訝な顔をして答える。前大公の娘である彼女でさえアルバイトをしているというのが公助には信じられなかった。

「……軍を全部開けるのだから、誰も侵攻してこないといいけどね」

公助はフローラの呟いた言葉に驚愕する。軍の仕事を休みにしてでも喫茶店でアルバイトをしなければならぬということが信じられなかった。なんなんだ、この軍は。

「さて、食事も終わったことですし……」

いつの間にか、シンディとフローラは食事を終えていた。二人はトレイをもって席を立つ。

「ワタクシ達はそろそろお暇させていただきますわ。では、いい夢を」

「司令さん、明日は遅刻しないように……」

二人はそれぞれに言葉を残して去っていった。彼女らが完全に見

えなくなつたのを確認すると、公助は大きく溜息を吐く。
全くなんだ、この軍は。

まぶしい日差しを感じて公助はゆつくりと起き上がる。目覚めは最高に良かった。

軍服に着替えようと思い、昨日比奈代に言われたことを思い出す。今日は軍は休みだった。

アルバイトをするという話であったが、どういう服装をしていけばいいのか全く分からなかった。昨日着ていたスーツをもう一度羽織った。

宿舎からトランク館に行くまでの間、彼は誰にも会うことはなかった。まるで世界が滅んでしまったのかと疑いたくなるくらいに基地内は整然としていた。

食事を取ろうと食堂のドアを開ける。しかし、中には一人の姿を見ることも出来ず、昨日はここで料理を作っていたヤンもいなかった。

「あれ……もしかして、置いてかれた？」

寝坊でもいたのかと思い、時計を見る。時計は七時半を示していた。とりわけ寝坊したわけでもなさそうだ。

ならば、なぜここに誰もいない？

公助はそう思いながらも他に仕方ないので、少しばかり早いと思いつながら昨日比奈代に渡された住所を目指して歩くことにした。

それほど時間はかからなかった。軍の正門を出て、ディジーの咲き乱れる丘を越えてすぐ麓にそれはあった。

店名を見る。

喫茶『ヒナ』。ここで間違いはない。

しかし店の看板は準備中になっており、店の明かりも点いていなかった。

「……人なんているのか？」

そう呟いて公助は店のドアをノックする。しかし、中からは何の応答もなかった。

「入れるのかな……」

首を傾げながらドアノブに手をかける。予想とは反して、ドアは簡単に開いた。

いくら朝方とはいえ、店内は暗いので公助は入り口付近にあると思しき部屋のスイッチを探す。案の定、すぐにそれは見つかった。スイッチを押すと、煌々と電灯が光る。

パン！

一斉に渴いた音が鳴り響き、紙吹雪が宙を舞う。公助は何が起きたのか瞬時に理會出来なかった。

「ようこそ、喫茶『ヒナ』へ！」

幾重にも女性の声が重なって公助を迎える。すぐに彼女達が昨日会ったばかりの軍人だというのが分かった。

「どうですか、公助さん。びっくりしました？」

「ああ、驚いたよ」

比奈代がそう聞いてくるので公助は素直に答える。

皆軍服なんかではなかった。喫茶店の制服なのだろう、赤を基調としたメイド風の服装で、皆頭の上にフリルのリボンを乗せている。喫茶店の制服を着ている彼女達を見ると、やっぱり年頃の女の子なんだと思う。

その中で、二人ほど見慣れない人物がいた。

「ヒナさん、機能紹介しきれなかったのって……」

「あ、はい、彼女はピリカ・ノンノさん。『カムイの御子』の能力者ですよ」

「コースケか？」

比奈代が公助に説明していると、ピリカの方からこちらに寄って

きた。

「オラはピリカ。よろしく」

「今度新しい司令としてこちらに配属になりました岩館 公助です。よろしく」

「ここは喫茶店だ。固くなんな！」

ピリカは笑顔で公助の肩を軽くはたく。随分男らしい印象を彼は感じた。

「じゃあ、オラはこれで」

そう言つとピリカは厨房の方に行つてしまった。

「まあ見ての通り、ピリカさんはああいう性格なので、今後ともいろいろ迷惑をかけるかと……」

「いや、いい子だと思うよ」

公助は素直にそう言つた。男らしい話をフランコとだけしていても肩が凝りそうだからだ。

「そういえば、フランコさんは？」

「ああ、フランコさんでしたら今厨房の方でヤンさんと仕込みしています」

意外だつた。フランコが料理出来るとは思わなかつた。

「あなたが岩館さんですか？」

突如として一人の女性が頬に手を当てたまま公助に話しかけてきた。そういえばこの人を忘れていた。公助が昨日会っていないもう一人の人物。

「私は菊池 マリと申します。娘がお世話になつて……」

「比奈代さんのお母様ですか？」

彼は思わず息を呑んだ。顔立ちがそっくりなのもびっくりなのだが、年相応の顔をしていない。一目見たら誰もが比奈代の姉だといふだろう。

「私の顔が何か？」

「いつ、いえ、それよりも、お母様も能力者かなんかで？」

「いいえ、異能力の方はさっぱり」

彼女はふふと小さく笑い首を横に振る。やはり、年相応には見えない。

「びつくりしたでしょう。私のお母さんがここにいるのはこの喫茶店、『ヒナ』のオーナーだからです」

「はあ、そうでしたか……」

公助は感嘆の声をあげる。店に自分の娘の名前をつけるだろうか。「ですから、私のことも『お母さん』ではなくて、『オーナー』と呼んでくださいね」

比奈代の母親から注文が入り、公助は大人しく従うことにした。

「じゃあ、店の奥が更衣室になってるから、これに着替えてきてください」

比奈代から制服と思しきものを渡され、公助は大人しく更衣室へと向かった。

二章 喫茶『ヒナ』 2

着替えを終えた公助がフロアに顔を出すと、皆が一斉に感嘆の声をあげる。

「ピッタリじゃない」

シンディがそう言うのと全員が同じように頷く。

「何か『マスター』みたいですね」

エリシアの言葉に再び一同が頷く。

「みたいじゃなくて、公助さんは本当にマスターになるんですよ」

「よっ、マスター」

全員が同じように公助に声をかける。なんと仲のいい店だろうか。それよりも……。

「『マスター』ってどういうことですか？」

公助は比奈代に尋ねる。彼女達の言うことがいまいち理解出来ない。

「どうもこうも『マスター』は『マスター』ですよ。公助さんはこの店の店長さんです」

「……店長？」

公助は脳をフル回転させて『てんちょう』の漢字変換を試みたが、この場にじっくりくるのはこの言葉しかなかった。

それにしても大丈夫なのだろうか。今日入ったばかりのアルバイトが店長だなんて。

「さて、じゃあ時間も迫っていることですから店を開けますよ」

「ちよっと待ってください！ マスターって何をすれば……」

「とりあえずマスターっぽく立っていてください。後は色々な指示を出すだけで結構です」

そう言いながら比奈代の母親——オーナーが店の立て札を『OPEN』に変える。その途端、客がぽつぽつと入ってきた。

『いらっしやいませ！ 喫茶『ヒナ』へようこそ！』

一同がそう言いながら会釈する。周りに合わせて公助も会釈した。それにしても大丈夫なのだろうか。まだ全員の性格を把握していないのに、指示なんか出してしまつて。

開店からしばらくして、公助は混乱の只中にいた。

お昼時というのも手伝つて喫茶『ヒナ』は大盛況。猫の手も借りたいほどの忙しさで公助は各々に指示を出しながら依然マスターっぽく佇んでいた。

「エリシアさん、そこ注文聞いて」

「お待たせしました、ご注文の方は？」

「ヤン、料理出来てる？」

「……………」

「……まだ恥ずかしいのかな？」

「マスター。三番テーブル上がったよ」

「ありがとうございます、フランコさん。リーザ、これ三番テーブル」

「分かったよ、お兄ちゃん」

「……リーザ、店でお兄ちゃんはちよつと……」

「マスターお兄ちゃん」

「……………やつぱりお兄ちゃんがいいや」

マスターお兄ちゃんとは何のことやらと顔を歪めながらしぶしぶ答える。

そんなこんなで公助は多忙ながらも一人一人の長所や短所を把握しながら指示を出していった。これはいい機会だと思う。個人の性格をこれで把握することが出来、戦闘の際に一発で指示を送ることが出来る。

バイトもまんざらではないなと改めて思った。

「公助さん、いい『マスター』出来てますよ」

オーナーが近づいてきてそう言う。彼は「いえいえ………」と言いつつながらも、心中では嬉しかった。

「先代の『マスター』より手際がいいよね」

そこに料理を運んだリーザが次の注文を伝えにくる。

「先代のマスターって？」

「こらそこ！ 私語は慎みなさい！」

「りょーかい！ 先代マスター」

「……………」

リーザは指差し注意したシンディに敬礼して、次の注文をとりに行く。沈黙の中、どうしてもシンディと目を合わせることが出来なかった。

それにしても意外だ。シンディにも苦手なことがあったとは。

「そうね、シンディさんは指示するより前に自分で行動していたからね。せっかちな人だし」

オーナーが耳元で呟く。ということはつまり、彼女は指示の手際が悪いだけで仕事は公助の何倍もしていたということだ。遠回しに自分が責められている気がする公助だった。

一段落着いて、店に誰もいなくなった頃にようやく昼食を取る。

「今日はお客さん少なかったな」

ピリカがフローラにそう言うのを聞いて公助は驚く。これより忙しい毎日を過ごしているなら軍隊で鍛える必要もないだろう。

「はいマスター、お茶です」

そう言っただけで比奈代が丁寧に湯飲みに入った緑茶を出す。この国には日本茶の文化が浸透しているのかと公助は疑問に思ったがあえて口にできなかった。

茶をすすりながらふと思う。何で自分はディジー公国まで来てアルバイトなどしているのかと。

こんなことをやっていると、この国が周囲の国から狙われていることを忘れてしまう。平和な町、のどかな人々。まるで戦争をしていないようである。

その時、急にサイレンのような音が響き渡る。公助は刹那的に判

断する。彼の記憶にある敵襲のサインと、状況が同じだった。

「まずい、基地に戻らなくては！」

公助が一人慌てるのを、周りの軍人達は不思議そうに見つめる。

「どうしたんだ、早く戻らないと……」

「戻る必要はなくてよ」

シンデイが淡々と答える。他の娘達のはゆっくりと店から出て行った。

「基地に戻っても武器なんかなくてよ」

「じゃあどうやって戦えば……」

「私達が『武器』でしてよ」

まだシンデイの言っていることが理解出来なかった。戦闘機に丸腰で挑むつもりだろうか。

「まだ私達の『異能力』をお見せしていませんでしたわね。今から披露いたしますわ」

そう言って彼女も公助に背を向け、店から出て行った。

混乱したまま、公助はふと思う。

この軍に、戦争する気はあるのだろうか、と。

二章 喫茶『ヒナ』 3

首を傾げながら公助はシンディと共に店を出る。遠くの空を見つめると既に数機の機影が確認出来た。

「爆撃機が四機。戦闘機が十四機です」

「えっ？」

状況報告を済ませた比奈代の言葉に驚きを隠せなかった。まさかこの短時間で基地まで戻れるわけもあるまい。レーダーで確認しなければ到底見えないほどの距離なのに、どうして分かるのか……。

「ああ、そう言えばまだ紹介してませんでしたね。これ、私の異能力『メデューサの瞳』の能力の一つなんです」

比奈代は首を傾げたままの公助にそう説明を加える。

「千里眼みたいな能力を兼ね備えてまして、他にもあるんですけど、今説明できるのはこれだけです」

この上ない武器であると公助は思う。戦場において、先に敵を見つけられるほど有利に展開を運べることはない。戦闘の際のファーストアタックはその戦闘の勝敗を決定付けるほど重要なのだ。

「空戦なのか？　じゃあ、オラに出番ないな」

ピリカはそう呟くと喫茶店に戻ってしまった。それに続くようにヤンとフローラ、アリスも喫茶店に戻る。

「え、ちよつと、皆……」

「ここにいたってやることないからね。喫茶店で休ませてもらうよ。アリスはそう言って喫茶店の扉を閉めた。

「いや、そうじゃなくて……」

住民の避難とか、させなくていいのか？

公助はそう思ったが、しかし口に出せない。町にいる住民を見てもどうしたって急いでいるようには見えない。それほど、この国の防御壁は鉄壁なのだろうか。

「じゃあ行ってくるね、お兄ちゃん」

「コーさん。あたしも行つてきます」

アンジェラは翼を羽ばたかせ、リーザは箒にまたがって上空まで駆け上がる。昨日、二人に初めて会った時に見た光景だった。

二人に向かつてシンディが呼びかける。

「二人とも、援護の必要はあつて？」

『ない！』

上空からはつきりとした返事が聞こえた。シンディは首を横に振って頭をかく。

「まったく、ワタクシも用なしじゃありませんこと？」

そう言ったものの、他の皆と違って彼女が喫茶店に戻ることはなかった。公助、比奈代、比奈代の母、シンディ、フランコ、エリシアの六人で喫茶店の前から遙か上空、戦闘機と同高度まで飛翔する二人を見つめた。

「……大丈夫なんですか？」

公助は心配のあまりシンディに尋ねる。シンディは首を縦に振った。

「ええ、彼女達はいわば空のエリート。心配はありませんわ」

「そうは言つても……」

戦闘機相手に生身の少女が二人。どうしても心配である。そうこ
うしている間にディジー公国の領空内に戦闘機の編隊が進入し、海
岸線でそれを止めようと二人が対峙する。交戦。^{エンゲージ}

戦闘機は挨拶とばかりにミサイルを二人に向かつて撃ち込む。直
撃すればひとたまりもない。

「シンディさん！」

「大丈夫ですわ！」

声を荒げる公助にそれ以上の声でシンディがなだめる。彼にとつ
ては初めての戦闘。落ち着きがないのにも無理はなかった。

公助が目を覆わんとした途端、リーザが笑みを浮かべる。

「アン、バリアー！」

「分かつてる！」

刹那、アンジェラとリーザの周囲に透明であるが、『何か』が発生し、ミサイルをはじく。ミサイルは即座に爆散し、白い煙がもうもうと立ち上がる。

「……何が、起きた？」

「言いましたでしょ。大丈夫ですわって」

シンディは自慢げな笑みを浮かべる。公助には何が何だかよく分からなかった。

そのうちに、白い煙の中から二人が飛び出す。そして、リーザが杖をゆつくりと回転させた。

「両翼落っこちちゃえ！」

リーザが告げると同時に敵の戦闘機はすべてがすべて、両翼が綺麗に外れる。そしてそれらは急降下。ディジーの美しい海に向かって真つ逆さまに落ちる。

「不時着せいこー！」

もう一度リーザが杖を振るう。すると海に向かって真つ直ぐに落ちていった戦闘機が急激に浮上、大破することなく海に浮かぶ。

「……………」

公助は目の前で起きた出来事が到底信じられなかった。異能力者というだけで、戦闘機を凌駕出来るほどの力を兼ね備えているのか。この少女たちが、そんな力を……。

「『天空の使者』の能力は鉄壁のガード。『垣根の上にいる女』は白魔法以外の魔法全般が扱えます」

「…………… ああ」

辛うじて返事は出来たものの、公助の頭にその説明が入ってくることはなかった。目の前で起きた出来事を処理するのに、脳のスピードが追いつかないのである」

「ヒナ、後処理は頼みましたわよ」

「はい、捕虜でよろしいですね？」

シンディは無言で頷き、喫茶店に戻る。「では」と比奈代は氣を取り直して、二人の帰りを待った。

「どちらに落ちましたか？」

比奈代は二人が地上に降り立つと早々に尋ねる。アンジェラがエリシアから飲み物を受け取りながら答える。

「西海岸。そう遠くはないですよ」

「かしこまりました。では公助さん。一緒に行きましょう」

「僕？」

一体何をしに行くのだろう。公助は必死に脳内をフル回転させながら思考したが、しかし答えが出ることにはなかった。比奈代はその様子を見て微笑み、答えの出ない公助に言葉をかけた。

「事後処理です。さあ早く」

公助はまだ処理し切れていない脳内で新たな疑問としてその言葉を迎えた。

事後処理とは、一体何をするのだろう……。

二章 喫茶『ヒナ』 4

「ヒナさん、事後処理って一体……」

「まあ、行けば分かりますから」

比奈代はハンドルを握りながらそう答える。

ディジーの花野の中央を軍用ジープが走るのはすごく違和感を感じる。これが普通の乗用車であるならば、まるで戦争なんて起きていないようだった。まもなくディジーの野原を抜け、海岸に辿り着く。島の中央に位置するユリオプスから三十分足らずで着いてしまった。公助は改めてこの島の小ささを感じる。

こんな小さな島国に各国は脅威を感じているのか……。

彼には、それが不思議で仕方なかった。

「さあ、着きましたよ」

比奈代の声で彼はジープを降りる。そして海岸をしばらく歩いていくと、見事に両翼が綺麗に削がれた戦闘機が十八機。肩身を狭くして何故か沈まずに海辺を漂っていた。

二人を見たライス共和国の戦闘機乗りの反応は大きく二つに分かれた。

一つはもうどうにもならないと諦めて溜息を吐いている者。

もう一つはまだ諦めずに拳銃を握り締めて銃口を二人に向けている者。

「……おかしいな。戦闘機乗りが拳銃を所持する必要はない。空では拳銃を使わないからね。それなのに、まるで地上で戦闘があると分かっているみたいに……」

「分かっているんです」

「えっ？」

公助は思わず横を向く。比奈代は拳銃にうろたえることなく笑顔を振りまいて言葉を続けた。

「『たとえば味方が殺されたとしても敵は殺すな』それが私達の軍の

モットーです」

「何て……」

公助はあまりの事態に言葉を失う。戦争で死者を出さないなんて聞いたことがない。相手を殺さなければ、自分が勝つなんてことは出来ないはずなのに……。

しかし、現状では確かに一人も死んでない敵の戦闘機の一団がいるのも確かだった。

「そんな甘いことを……」

「甘いとおっしゃいまして、私達は今までそれを実行して来ました。だから、出来ないことはないんです」

随分な自信だなど公助は思う。しかし、拳銃を所持している相手に対してどう対応するればいいのだろうか。

そんな状況を全く気にせず比奈代が右手を高々と上げる。

「戦闘意欲のないものは直ちに投降しなさい。そうすればあなたたちははれて捕虜となります」

「捕虜？」

そんな簡単に引き下がるだろうかと少しばかり疑問に思ったが、それも公助の思い違いだと知る。

彼らの中の一部、諦めたかのように溜息を吐いていた一団はせつせとコクピットから出てくる。

「あ、少し待つてください。いまボートを出しますから」

と言って比奈代は波間に揺れる戦闘機を見つめた。すると戦闘機が一転、ボートに様変わりしたではないか。

「捕虜になる方はそちらのボートに乗ってください。大丈夫です。命の補償はします」

比奈代の言葉に従って十人ほどがそのボートに乗った。そして、そのまま浜辺へと向かう。

『待て！』

刹那的に銃声が鳴り響く。戦闘機乗りの一人が引き金を引いていた。しかし、銃口の向きは二人ではなく、捕虜になろうとしている

戦闘機乗り達の方。

幸い銃弾は誰にも当たっていなかった。しかし、今までの穏やかな空気が一転、張り詰めた空気が辺りを包み込む。

『裏切るのか？』

『裏切るわけではない。現状を知れ、私達に勝ち目はない』

戦闘機乗り達は互いに言葉を交わす。しかし、意思の疎通は出来そうになかった。やがて、逆上した戦闘派の一人が再び引き金を絞る。しかし、一向に銃弾は出なかった。

「……危ないことしますね」

公助の隣で比奈代が呟く。公助は瞬時に察する。彼の拳銃が不発なもの、彼女の能力のせいであると。

「平和にいきましょう」

『うるさい！』

別の一人が引き金を引き、比奈代に向かって銃弾が発射される。

しかし、その弾が彼女を貫通することはなかった。

比奈代は一度嘆息し、やがて重い口を開いた。

「……分かりました。では、強引に連れて行きます」

比奈代が未だに投降しようとしないうちに八人に睨みを利かせる。

その途端、八人は石になった。

比喩ではなく、本当に石化したのだ。

「……何が起きたんだ？」

公助は状況を全く理解出来ないでいた。いや、理解はしていた。していたのだが、それを信じるのが出来なかったのだ。

隣で比奈代が微笑む。そして彼女はぽそりと呟いた。

「……私の、能力です」

かくして、ライス共和国の捕虜十八名をディジー公国軍は得たのである。

その後、比奈代はボートで流れてきた捕虜を形式上の手錠で繋ぎ（まったくもってユルユルであるのだ、この手錠は）、ユリオプスの基地へと戻った。

「戻りましたよ。シンディさん」

「お疲れ様。捕虜は？」

司令室に入るとシンディが比奈代に尋ねる。彼女は無言で捕虜を十人司令室に入れた。

「あら、報告より人数が少なくてよ」

「ごめんなさい。石化させてしましまして……」

まったく仕方ないな。そう言わんばかりにシンディは深く息を吐いた。

「エリシアに直して頂きなさい」

「そう言うと思って、先程医務室に運んでおきましたよ」

疲労感を表情に出しながら公助が司令室に入ってくる。

「あら司令、お帰りなさい。初めてのミッションはどうでした？」

「どうって言われても、僕は何もやってませんから」

それに元来公助は司令なのだから、今後彼が戦場に出て行くことはそうはない。

「少し海が汚れたかもしれませんがね」

「大丈夫ですわ。ピリカを行かせましたから」

自然の浄化能力で汚れを無くすのだとシンディは公助に説明した。

「さて、これでワタクシ達の異能はあらかた理解出来まして？」

「まあほとんどは。あとは僕が彼女らを上手く操作できるかだけだ

……」

「じきに慣れましてよ」

ワタクシ達の司令ですから。シンディはそう付け加えた。

「さて、情報屋さんとリーザを呼んできてくださる？」

分かりましたと比奈代は司令室から出て行く。

「今から何をするんですか？」

公助がシンディに尋ねると彼女は薄ら笑いを浮かべながら公助に答えた。

「取り調べでしてよ」

その様子を見ていたライス軍の兵が震え上がったのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4797f/>

ヒナギクの咲く丘に

2010年10月9日01時50分発行